



審査員特別賞

リリー・フランキー賞

## 命の長さ

銀翼慶（ペンネーム）

私が小学校三年生の春、我が家に熱帯魚がやって来た。

熱帯魚の餌を食べる姿。追いかけてまわされている姿。敷石の中へ潜ろうとする姿。それらは全て、私にとって新鮮で、楽しみ・喜びへと変わることばかりだった。気がついた頃には、学校から帰ると水槽の前に座っているのが日課になっていた。

熱帯魚を飼い始めてから三ヶ月たった頃、一匹のグッピーのお腹が大きくなっていることに気付いた。それは私が一番気に入っていた、赤と緑のラインが入ったグッピーだった。最初は「一匹だけ太ってる」と思い姉と笑

っていたときすらあった。しかし、その後もお腹は大きくなり続け、水面上がってくる回数が増え、泳ぐペースが遅くなっていった。

「笑っている場合じゃない。」

そう思った私は、別の水槽に移し、しばらく様子を見ていることにした。

それから数日後、学校から帰りいつものように熱帯魚を見た。すると、お腹が大きくなっているグッピーの周りに透明でとても小さいグッピーが五匹ほど泳いでいる。「わあ。」そうつぶやいていた。うれしかった。「このグッピーは何色になるんだろう」「お父さんグッピーは誰なんだろう」そんなことをずっと考えていた。その後もどんどん数は増え、それと比例するかのようにお腹は小さくなっていた。その後、自分の部屋に戻り宿題をやり夕食を食べている間も、ずっとグッピーのことが気になっていった。

夕食の後、改めてグッピーを見に行った。そこにはお母さんグッピーしかいなかった。どの方向から見ても一

匹も見つからない。おかしい。焦りと不安でいっぱいになった私は、すぐに調べてみた。どうやら、親は子供を産んだ後それを自分の子供だと気付かずに食べてしまうらしい。そのため、子供が生まれたらすぐに別の水槽に移すか、網などで囲ってやらないといけないらしい。結局、敷石のすきまに逃げ込んでいた二匹しか残らなかった。わずか一時間の命。たった一時間で何匹もの命が失われてしまった。いや、失わせてしまった。なんて、もっと調べなかつたのだろう。なんて、ずっと見てあげなかつたのだろう。もし、ずっと見ていればもつとたくさん残っていたかもしれないのに。そういつた思いが頭の中でグルグル回っていた。

「終わってしまったことは仕方ない。今度は残った二匹が子供を産んでくれるくらい大きくなるまで育てよう。」母は、そういつて私を励ましてくれた。

「うん。」

結果的には、我が家に二つの命が増えた。きつとこれからもどんどん増えていくだろうと思った。だったら今あ

る小さな命と少しでも長く一緒にいたい。私は強く願った。そんな私の思いはたった二文字の言葉で母には伝わったようだ。

数ヶ月たった頃、順調に成長しているようだが相変わらず小さい二匹のグッピーをよそに、一匹のグッピーのお腹が大きくなり始めた。それは、一番小柄でいつも仲間に追い掛け回されているグッピーだった。今度こそはと思い、いつ頃子供を産むのかずっと楽しみにしていた。と同時に少し緊張もしていた。

それからちょうど二週間がたった頃、学校から帰ると水槽の中には小さなグッピーが一匹泳いでいた。慌てて網を出し別の水槽へ移した。それから、産まれたら網ですくつて別の水槽へ移す、という時間のかかる作業を繰り返していた。最後の二匹は産まれてくるまで特別長かったように感じた。

「緊張した。」

思ってもいなかったのにそうつぶやいていた。つぶやいてから、手に汗を握り網の持ち手の跡がくつきり残って

いることに気がついた。窓の外は暗くなり気がつくとき三時間もたっていた。その三時間で八匹の新たな命が誕生した。

次の日の朝、もう一度水槽を確認すると小さく透明なグッピーが八匹ちゃんと泳いでいる。うれしかった。その日、学校が休みなので久しぶりに熱帯魚を買ったお店に行くことにした。以前は学校帰りに毎日寄っていたが熱帯魚を飼い始めてからは、一度もいっていなかった。

お店の前に行くと、一人の女の子がたっていた。

「ねえ。ももちゃん？」

「あれっ。久しぶりだね。」

隣の学校の同い年の子で学校帰りによると、いつもいた。動物に関してはなんでも知っている。見たこともない犬の写真を見せてくれたり、砂漠に住んでいる動物について教えてくれたりもした。そんなももちゃんが同い年だと聞いたときは正直驚いた。それに動物の話ばかりで自分については何も話さない子だった。

「最近全然お店にこなかったけど、どうかしたの？」

「グッピーを十匹とエンゼルフィッシュ二匹を飼い始めたんだよ。ちょうど昨日新たに八匹も生まれたんだよ。」

「えっすごい。」

最初はなにも知らずに、たくさんの命を死なせてしまったこと。それでも二回目は、八匹をちゃんと別の水槽に移せたこと。今でもみんな元気であること。飼い始めてから四ヶ月間のたくさんの出来事を全部はなした。その間ももちゃんはずつとうなずきながら、一生懸命に聞いてくれた。

「うまれたばかりのグッピーか。うちも見てみたいな。」

「いつでも来てよ。家、すぐ近くだから。」

「約束だよ。」

そう言って、ももちゃんは笑ってくれた。

次の日学校から帰る途中、ももちゃんに会った。その手には写真が握られていた。

「ももちゃん。その写真、何？」

「これ、昔飼っていた猫なの。かわいいでしょ。」

それは、目の青い猫だった。

「うん。かわいい。なんて名前？」

「ブルー。」

「なんか、かっこいいね。」

「へへっ。ありがとう。この写真あげるよ。」

「いいの？大切にするね。」

「うん。」

そう言っつて、ももちゃんは帰ってしまった。それと入れ替わるように、スーツを着た背の高い男性が来た。

「君が、ももの友達だね？」

その男性は、見た目とは違い優しい口調ではなしかけてきた。

「はい。」

「そうか。私は、ももの父だ。実はもものお母さんが二週間前に子供を産んだのだが、三日後に死んでしまっつてね。それから、お母さんも体調を崩し始めてしまった。ももも妻も、もちろん私も、新しい子供の成長をとても楽しみにしていたんだ。そのぶんショックは大きかった。医者からも、リラククスできる環境を作っつてあげて欲しいと

いと言われてね。長野の方へ引つ越すことになっつたんだ。」

急にたくさんのことを話され、私の頭ではほとんど理解しきれなかつた。

「ももは、人と接するのが極端に苦手だね。一昨年までは、ほとんど学校を休んでいたんだよ。そしたら突然、熱帯魚のお店で友達が出来たつて言うんだ。それから学校にも行き始めるようになってね。だから君には私も妻も感謝しているんだよ。ありがとう。」

そう言っつて、ももちゃんのお父さんはいなくなつてしまつた。

私はしばらく呆然と立っていた。途中から、淡々と話すももちゃんのお父さんの顔を見ることができなかつた。ふと、ももちゃんが昔話していたことを思い出した。「子供を産んで自分で育てる動物はね、子供がいなくなつたり死んでしまつたりすると、親までおかしくなつてしまつたつて。子供が死んだことに気付かず、ずつと世話をしようとする動物もいるんだつて。でも、そうい

う親はたいいてい群れから追い出されちゃうんだって。かわいそうだよね。」

今になって、ようやく理解出来た気がした。

私は急いで家に戻り、グッピーたちの写真を撮った。すぐに印刷し、裏に「ありがとう」と書いた。書きたいことはたくさんあったが、他にあてはまる言葉はないと思っただ。

その写真を持って、もう一度お店にいった。最後にもう一度、このお店に来るだろうと思っただからだ。でも、ももちゃんは来なかった。ももちゃんからもらった写真は、まだポケットに入っていた。裏を見るとそこには、「ずっと忘れないよ。また会いに行くからね」と書かれている。そういえば、ももちゃんに久しぶりに会ったときに「ずっと来なかったね」と言ってくれた。妹が生まれた日も、たったの三日間で死んでしまい悲しみに包まれている日も、毎日お店には来てくれていたんだ。それに、グッピーの話はどんなことを思いながら聞いていたんだろう。そんなことを考えているうちに、涙があふれ

出てきた。

家に戻り水槽の前に座った。写真の裏には、「また会いに行く」と書かれていた。ももちゃんが戻ってくるときに、たくさんのグッピーを見せてあげよう。それが、私に出来る最高のことだと、今でも思っている。